第４学年社会科学習指導案

指導者　呉市立両城小学校
教諭　　浜本　愛子

１　日　時　　平成28年11月28日（月）　第１校時
２　学　年　　第４学年１組　17名（男子９名　女子８名）
３　単　元　　特色ある地いきと人々のくらし「伝統的な技術を活かす川尻の筆づくり」（全15時間）
４　本単元について
⑴ 単元観
本単元は，小学校学習指導要領社会の第３学年及び第４学年の内容

⑹　県（都，道，府）の様子について，次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ，県（都，道，府）の特色を考えるようにする。 ウ　県（都，道，府）内の特色ある地域の人々の生活

を受けて設定した。

本単元では，広島県の地形や産業などの概要や分布に見られる特色，及び地域の自然環境や文化などの地域の資源を保護・活用している地域やそこで暮らしている人々の生活に見られる特色やよさを具体的に考えられるようにすることをねらいとしている。これらを受けて，本単元では，「土地の特性を生かした産物を活用している地域」として，北広島町芸北地区のトマトづくりと尾道市瀬戸田町のレモンづくりを，「古くから伝わっている技術や技法を受け継いでいる地域」として，呉市川尻町の筆づくりを取り上げて指導する。

北広島町芸北地区では，広島県で最も積雪量が多いという気候や広い土地を生かして，米，野菜等の農業に加え，スキー場等のレジャー業も盛んに行われている。現在では，土地の多くが牧草地だった歴史や，涼しい気候を生かして，他の産地より遅く収穫する「高原トマト」の生産に力を入れている。

尾道市瀬戸田町では，瀬戸田の温暖で雨の少ない気候や地形を生かして，国内産レモンの需要の変化とともにレモンづくりを展開し，今では「大長レモン」とともに「広島レモン」として日本一の生産高を誇っている。

呉市川尻町では，江戸時代末期から筆づくりが受け継がれ発展し，平成 16 年に「川尻筆」は伝統的工芸品の指定を受けている。現在，毛筆，画筆などが主に生産され，全国シェア３割を占め，「熊野筆」とともに広島県を代表する伝統的工芸品となっている。全国シェア１位の熊野筆は，奈良筆の製造方法を基に大量生産できるように「盆混ぜ」を取り入れ，作業工程を 20 以上に分業して製造している。そのため，１つの作業を習得するまでの期間が短くなり，職人は若い人も多い。その一方，川尻筆は，奈良時代から，天皇に献上する目的で作られたとされる京筆の製造方法である「練り混ぜ」を基にしており，「山羊」を主な原料として使用した高級毛筆の産地として誇りをもっている。しかし，作業工程を３～４つに分け，昔ながらの家内工業を中心に製造しているため，１つ１つの作業を習得するまでに約 10 年かかる。60 年前に比べ，職人の数は 10 分の１と大幅に減少し，さらに，職人の高齢化も進んでいる。以前は，町をあげて筆に関するイベントを行うなどのまちづくりに川尻筆を生かしていたものの，現在は停滞傾向にある。そのため，川尻筆の製造に携わる人々は，生産量を伸ばすため，遠方への行商や教育現場の声を活かした新商品の開発を行ったり，後継者問題等の課題を改善すべく作業環境の整備や作業工程のマニュアル化をしたりしている。

そこで開発された商品の一つが小筆「維新」である。この「維新」は，伝統的工芸品のもつ高級・高価というイメージを払拭し，もっと人々の生活の中で使ってもらいたいという願いから，書道入門期の小学生を対象にして開発したものである。この「維新」の開発を通して，これまでの技術を維持するだけでなく，それを発展させ，伝統的工芸品を作り続けていこうとする人々の工夫や努力について考えていくことができる。

本単元で取り上げた３つの地域の学習を通して，広島県には様々な特色のある地域があり，人々はその自然環境，伝統や文化などの特色を生かして工夫して生活していることを捉えさせる。また，これらの学習を通して，児童に「自分達の県に誇りと愛情をもち，地域社会の発展を願う態度」を育てることができる単元である。

⑵ 児童観
本学級の児童は，様々な社会事象に疑問をもち，その疑問を解決しようと意欲的に調べ学習に取り組んでいる。ニュース等への関心が高く，様々な社会事象を知っている児童がおり，その児童の発言が学級全体の学びのきっかけになることが多々ある。１学期単元「水はどこから」では，本庄水源地を見学し，意欲的に質問したり，メモしたりしながら，水源地の役割やその事業に携わる人々の工夫や努力を理解することができた。しかし，その反面，生活経験や知識が乏しく，学習問題に対して自分なりの予想をもつことが難しい児童や，資料を自分の生活と結び付けながら考えることが難しい児童もいる。

広島県の特色あるものについてのアンケートに対し，87.5％の児童が「レモン」「みかん」「牡蠣」な

どのいずれかを挙げていた。食育教育の取組の一つである「ひろしま給食 100 万食プロジェクト」の成果だと考える。しかし，その一方，伝統的工芸品である「熊野筆」を挙げている児童は１名であり，食べ物以外のものを特産物として意識していないという実態が分かった。伝統的な工業については，「伝統工芸」という言葉自体知っている児童は０名であった。自分達の住んでいる広島県の伝統的工芸品である「熊野筆」について，25％の児童が耳にしたことがあるものの，なぜ有名なのか，どんな筆なのかは全く知らないと回答している。さらに，呉市の伝統的工芸品である「川尻筆」については，全ての児童が耳にしたことがないと回答しており，これらは児童にとって身近な存在ではないことが分かった。

(3) 指導観

指導にあたっては，まず，広島県の観光ＰＲのためのキャッチコピー（平成 24 年）である「おしい！広島県」のＣＭを見せ，自分達が住んでいる県への興味関心を高め，「本当におしいの？広島県」という問題意識をもたせる。次に，児童が知っている広島県の特産物を地図で確認し，県内各地に様々な特色をもつ地域があることに気付かせる。その上で，「なぜ，その地域なのか」「どうやって作っているのか」など，個々の問題をもたせ，単元全体を貫く学習問題「広島県には，どのような特色を生かした地域があるのだろう」を設定する。特色ある３つの地域を取り上げ，「広島県魅力マップ」に調べたことや学習したことを書き加えさせ，それぞれの学習問題が課題解決に結び付くことを意識させた指導を行っていく。単元の終わりには，学習したことを生かして，自分が選んだ特色ある地域や，その地域の特色やよさを生かして生活している人々について調べ，「広島県魅力マップ」に書き加えさせる。この「広島県魅力マップ」を用いて，他の都道府県の小学生（４年生）に発信する活動を取り入れる。

「古くから伝わっている技術や技法を受け継いでいる地域『呉市川尻町の筆づくり』」については，全国シェア１位の熊野筆と３位の川尻筆の生産量を比較させ，「川尻筆とはどんな筆なのか」「熊野筆とどこが違うのか」という問題意識をもたせる。さらに，実際に原材料を提示し，「どのように筆が作られているのか」という問題意識をもたせる。その上で，資料を基に，江戸時代末期に他の地域から仕入れ持ち帰ったことをきっかけに「川尻筆」が作られるようになったことを理解させる。

次に，筆づくりの工程を調べ，川尻筆と熊野筆では作業工程や分業の仕方が異なること，二つの筆それぞれに良さがあり，伝統があることに気付かせる。また，川尻毛筆事業組合の職人をゲストティーチャーとした「筆づくり体験活動」を設定し，作業の一部分を体験させる。そこで，筆づくりが，いかに繊細で技術が必要なものなのかを体感させ，その技術を継承していく難しさに気付かせていく。さらに，職人の減少，書道人口の減少，外国産の輸入による影響などの厳しい現状の中，「川尻筆を作り続けていくために，どんな工夫や努力をしているのだろうか」という問題意識をもたせていく。そこで，川尻筆職人が開発した新商品小筆「維新」を取り上げ，その開発の理由を考えさせる。川尻筆を作り続けていくために，技術の継承だけでなく，川尻筆を買ってもらい，使ってもらうための工夫や努力があるという見方や考え方ができるようにする。このように古くから受け継がれている川尻筆を通して，自分達の県や市に誇りと愛情をもち，地域社会への発展を願う態度を育てていきたい。

その際，自分の考えを適切に表現し，友達と共に学び合うことができるように，新聞記事やグラフ，筆職人へのインタビュー内容等の資料を基に問題解決に向けたペアトークを取り入れ，自分の考えを根拠を基に論理的に説明できるようにする。また，友達の考えを受けてどのように考えたのかを説明したり，学級での学び合いを自分の言葉でまとめたりするなど，意図的に表現する場を設ける。

5　本単元の目標

○　広島県では，自然環境，伝統や文化などの地域の資源を保護・活用している人々が，特色あるまちづくりをしていることを理解し，自分達の住んでいる地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

○　地域の人々の生活と自然環境，伝統や文化などとの関連，願いを実現していく人々の工夫や努力，協力と生活の維持と向上との関連について，具体的資料を活用して調べたり考えたりしたことを分かりやすく表現する。

6　本単元の評価規準

ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断・表現	ウ 観察・資料活用の技能	エ 社会的事象についての知識・理解
○　広島県の特色ある地域の様子に関心をもち，意欲的に調べようとしている。 ○　広島県の地域の特色やよさを考えようとしている。	○　広島県内の特色ある地域の人々の生活について，学習問題や予想，学習計画を考え，表現している。 ○　広島県内の地域の特色を相互に比較して，それらのよさを考え，適切に表現している。 ○　伝統的な産業が行われている地域やそこに見られる人々の生活の特色を基に，これからの広島県について考え，適切に表現している。	○　地図や資料を活用して，広島県内の特色ある地域の様子について必要な情報を集め，読み取っている。 ○　調べたことを「広島県魅力マップ」などにまとめている。	○　広島県内には自然や地形の特性を生かして，特色あるまちづくりに取り組んでいる地域があることや，そこに見られる人々の生活の特色を理解している。 ○　広島県内には古くから伝わっている技術や技法を受け継いだ伝統的な産業が行われている地域があることや，そこに見られる人々の生活の特色を理解している。

7　教材分析【知識の構造図】

概念的知識

地域の人々は，自然環境，伝統や文化，産業などの地域の特色やよさを大切にし，それらを生かして生活している。

説明的知識

- 地域によって，異なる特色がある。
- 自然環境や土地の特性を生かした産物を作っている地域がある。
- 古くから伝わっている技術や技法を受け継いだ伝統的な産業が行われている地域がある。

記述的知識

- 県内には、様々な特色をもつ地域がある。 ①
- 北広島町芸北地区では、最も積雪量が多く夏も涼しいという気候を生かして、米や野菜等の農業、レジャー業が盛んである。 ②
- 北広島町芸北地区では、夏涼しい気候を生かして、他の出荷時期とずらした「高原トマト」を栽培し、特産物として販売している。 ③
- 尾道市瀬戸田町では、温暖で雨の少ない気候を生かしてレモンづくりを行い、広島県は全国一位のレモン生産県になっている。 ④
- 尾道市瀬戸田町では、レモンの生産量・出荷量の増加のため、品種改良や加工品の開発をしている。 ⑤
- 呉市川尻町では、伝統的な産業の筆づくりが盛んである。 ⑥
- 川尻筆は、「穂先」「軸」「組み立て」の三つの作業工程に分けて製造され、穂先は「練り混ぜ」の技法を用いている。 ⑦
- 筆の販売本数が減少傾向になる中、川尻筆に携わる人々は、子供達が使いやすい小筆「維新」を開発した。 ⑧
- 呉市川尻町では、筆づくりを地域の伝統的工芸品として、まちづくりに活用してきたが、後継者問題は依然残ったままである。 ⑨

用語・語句

- 特色　地域　地形
- 気候　積雪量
- 出荷時期　特産物　ニーズ　消費者
- 温暖　輸入　国産
- 農薬　加工　品種改良　協同組合
- 伝統的工芸品　伝統工業
- 伝統的な技法　技術　練り混ぜ　盆混ぜ
- 商品開発
- 化粧筆　競書大会

8　指導と評価の計画（計15時間）

次（時数）	過程	学習活動 【知識の構造図との関係】	評価の観点 関	思	技	知	評価規準	評価方法
一次（2）	つかむ	広島県のいろいろな特色をもった地域について知ることから学習問題をつくり，調べる計画を立てる。【①】（２時間）	○	◎			県内の特色ある地域の人々の生活に関心をもち，意欲的に調べようとしている。 県内の特色ある地域や人々の生活についての学習問題をつくり，学習計画を考え，表現している。	・発言 ・ノート
		学習問題：広島県には，どのような特色を生かした地域があるのだろう。						
二次（10）	調べる・考える	北広島町芸北地区では，積雪量の多い気候や広い土地を利用して，米や野菜等の農業，レジャー業に取り組んでいることについて調べる。【②】				◎	北広島町芸北地区の自然や地形の特徴と，米や野菜等の農業，レジャー業との関係を理解している。	・発言 ・ノート
		北広島町芸北地区では，夏の涼しい気候を利用して，トマトづくりに取り組んでいることについて調べる。【③】			◎		北広島町芸北地区では，気候の特色を生かしながら，時期をずらして出荷するなどの工夫をしてトマトづくりを行っていることを資料から読み取っている。	・発言 ・ノート
		尾道市瀬戸田町では，瀬戸内の温暖で雨の少ない気候を生かしてレモンづくりを行っていることを調べる。【④】				◎	尾道市瀬戸田町の自然や地形の特徴とレモン生産との関係を理解している。	・発言 ・ノート
		尾道市瀬戸田町で行っているレモンの生産量や出荷量の増加を目的とした取組を調べる。【⑤】		◎			品種改良や加工品の開発など，生産量や出荷量の増加に向けて行っている取組について考えている。	・発言 ・ノート
		呉市川尻町で筆づくりが盛んになった理由を調べる。【⑥】			◎		呉市川尻町の筆づくりに関する年表等の資料を基に調べ，川尻町で筆づくりが盛んになった経緯を読み取っている。	・発言 ・ノート
		「川尻筆」と「熊野筆」の作業工程を調べ，それぞれのよさを調べる。【⑦】				◎	筆づくりには，様々な工程があり，その中で最も重要な部分である「毛の混ぜ合わせ」には「練り混ぜ」「盆混ぜ」の２つがあることや，それぞれのよさを理解している。	・発言 ・ノート
		筆づくり体験を通して，川尻筆の職人の苦労や努力を調べる。（２時間）				◎	筆づくりはいかに繊細で技術が必要なものなのかを体験し，その技術を継承していく難しさがあることを理解している。	・発言 ・ノート
		呉市川尻町で行っている「川尻筆」の技術を受け継ぐためにしている取組を調べる。【⑧】（本時）		◎			川尻筆に携わっている人々が，伝統的工芸品をより多くの人が使い，身近に感じられるようにするためにしている工夫や努力と，それらに込められた願いを関係付けて考えている。	・発言 ・ノート
		川尻町における「川尻筆」を生かしたまちづくりの現状を基に，今後「川尻筆」の技術を受け継いでいくにはどうすればよいかを考える。【⑨】		◎			呉市川尻町では，筆づくりをまちづくりにどのように生かしてきたのかを調べ，今後の「川尻筆」について考えている。	・発言 ・ノート
三次（3）	まとめる	学習したことや地域について，「広島県魅力マップ」を基に比較しながら，その特色が分かるようにまとめ，県内各地の人々がどのような暮らしをしているのかを考える。（３時間）	○		○	◎	広島県のさまざまな地域には，自然環境，伝統や文化，産業などの地域の特色やよさを生かした人々の暮らしがあることを理解している。 自然環境，伝統や文化，産業などの地域の特色やよさを生かした人々の暮らしを調べたことを「広島県魅力マップ（白地図）」にまとめている。 「広島県魅力マップ（白地図）」を基に，広島県内の地域の特色やよさを考えようとしている。	・発言 ・白地図

9　本時の学習

(1)　目　　標

川尻筆の技術を活かした商品開発に関する資料を基に話し合うことを通して，伝統的工芸品がみんなの生活につながるものにするために新しい商品を開発し，技術をさらに発展させて受け継ごうとしていることについて考えることができる。

(2)　評価規準

川尻筆に携わっている人々が，伝統的工芸品をより多くの人が使い，身近に感じられるようにするためにしている工夫や努力と，それらに込められた「川尻筆の技術を次につなげていきたい」という願いを関係付けて考えている。

(3)　準 備 物

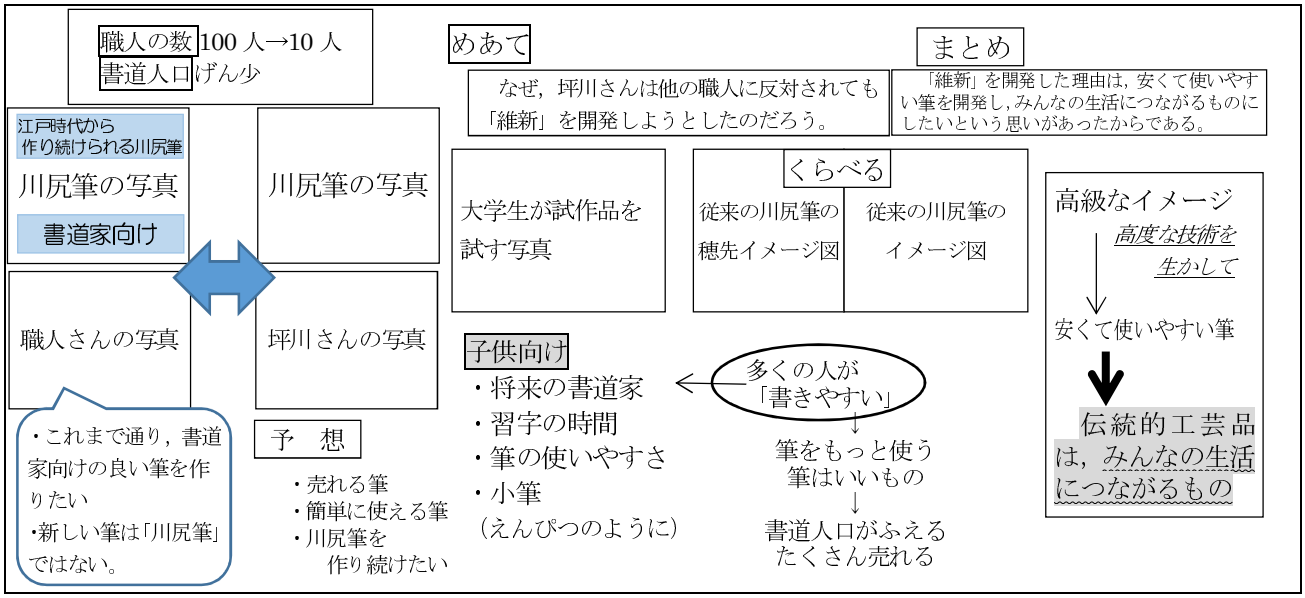
①　大学生が「維新」を試している様子が分かる写真とその説明

②　「従来の川尻筆」の穂先と「維新」の穂先の構造を示すイメージ図

③　川尻筆職人さんのお話

(4)　学習展開

過程	学習内容 (○主な発問)	予想される児童の反応	思考の方法	指導上の留意点（□） 評価規準（評価方法）（○）
つかむ	1　職人の減少，毛筆の製造本数や書道人口の減少から，川尻筆を作り続けていくことが難しい現状を知る。 2　川尻筆職人である坪川さんが開発した「維新」を知る。 3　学習問題を確認する。 なぜ，坪川さんは他の職人に反対されても「維新」を開発しようとしたのだろう。	・伝統ある技術を伝えていくのは難しいし，川尻筆はなくなってしまうかもしれない。 ・川尻筆の伝統が終わらないように，何か工夫しているにちがいない。 ・これまでの川尻筆と全然違う。 ・高度な技術があるのに，どうして「維新」を開発したのだろう。		□技術継承の難しさに加え，職人，製造本数，書道人口ともに大幅に減少していることを知らせ，川尻筆を作り続けることの難しさを想起させる。 □事前の書写の学習で，児童には，川尻筆であることを知らせず，「維新」を使う機会を設け，書き味や洗いやすさを体感させておく。 □「維新」の開発当初，他の職人達に反対されたときの様子を知らせ，高い技術があるにもかかわらず，なぜ，これまでとは違う安い筆（1本 600 円）を作ろうとしたのかという問題意識をもたせる。
予想する	4　学習問題に対する自分の考えをもち，話し合う。	・売れる筆を作りたかったから。 ・子供達のために簡単に使える筆を開発したかったから。 ・川尻筆を作り続けたかったから。		□坪川さんの立場になって，自分なりに予想させる。
調べる・考える	5　「維新」の資料を活用しながら，「維新」を開発した理由について話し合う。 ○　どのようにして，「維新」を開発したのでしょうか。 ○　どうして，子供向けの筆なのでしょうか。 ○　どうして，大筆でなく，小筆なのでしょうか。	・小学校の教師を目指す大学生 50 人に試してもらい，その評価を基に何度も作り直している。 ・子供が使えば，これから先も筆を使う人が増えるから。 ・筆を使い始めるのは，学校の書写の時間が多いから。 ・小筆の方が難しい。鉛筆から小筆につながるように，六角形の軸にしているのだろう。 ・筆が売れれば職人も増える。そうすれば，川尻筆を作り続けることができる。	比較	□筆づくりの工程以外の，開発のために行った作業が分かる資料を提示する。(資料①) □試してもらった対象（小学校教諭希望の大学生）に目を向けさせ，どんな筆を開発しようとしたのかを考えさせる。

調べる・考える	○　「維新」にこれまでの川尻筆の技術が生かされているのでしょうか。	・穂先の周りの毛は，川尻筆の技術である練り混ぜで作られ，この毛の配合によって，墨の含みや書き味が変わる。 ・「維新」は，川尻筆の技術があるからできた筆なんだ。	比較	□これまでの小筆との違いが分かるようにイメージ図を使って示し，児童に川尻筆の技術がどの部分に活かされているのか気付かせる。（資料②） □これまでの川尻筆や化学繊維だけの筆と「維新」を比較して考えさせる。（使い心地，後片付け，墨含み）
	○　「維新」の開発は，川尻筆を作り続けることにつながるのでしょうか。	・「維新」の開発によって，川尻筆の技術を活かした新しい技術を生み出せる。 ・「維新」をたくさんの子供達が使えば，筆の生産本数も筆人口も増え，また買う人も増える。		□「Aである。すると Bになる。」というように，筆を開発することが，筆づくりにどのような影響を及ぼすのか想像させる。
	6　「維新」を開発した坪川さんのお話を読み，川尻筆を作り続けていくためにどのような工夫をしているのか話し合う。	・伝統工芸品とは，昔から作り続けられているもので，使い続けられてこそ価値が出るものだから，多くの人に使ってもらえる筆を開発したんだ。 ・高度な技術を活かして開発することで，川尻筆という名前を広めているんだ。		□「維新」を開発した人のお話を提示し，伝統的工芸品とは，本来，人々の生活の中で使われて初めてその良さが分かるものであり，伝統的工芸品のもつイメージを払拭するために開発しようとしたことに気付かせる。（資料③）
まとめる	7　学習問題に対する自分の考えをノートにまとめる。 8　本時の学習を振り返り，次時の学習を確かめる。	まとめ （例）「維新」を開発した理由は，伝統的工芸品という高級なイメージでなく，安くて使いやすい筆を開発し，みんなの生活につながるものにしたいという思いがあったからである。これまでの川尻筆の技術をそのまま受け継ぐのではなく，さらに発展させて次の代につなげようとしている。	総合	○「維新」を開発した理由を，川尻筆に携わっている人々が，伝統的工芸品をより多くの人が使い，身近に感じられるようにするためにしている工夫や努力と，それらに込められた「川尻筆の技術を受け継ぎたい」という願いを関係付けて書いている。（ノート）

(5)　板書計画